

## 内戦——思想における歴史

デイヴィッド・アーミティージ  
(細川 道久訳)

### 解題

本稿は、二〇二〇年一月一六日(木曜日)の一七時より、青山学院大学総合研究所ビル一階第一九会議室にて開催された講演に先立ち、講演者のアーミティージ氏から送られてきた原稿を、当日の通訳を務めた細川道久(鹿児島大学)が翻訳したものである。本講演会の主催は、科研費基盤研究B「言語帝国主義と「翻訳」」(研究代表…平田雅博)、共催は、東京大学アメリカ太平洋地域研究センター、および青山学院大学史学科、後援は岩波書店であった。

講演者のデイヴィッド・アーミティージ(David Armitage、ハーヴァード大学歴史学部教授)氏は、今回、アメリカ研究振興会、東京大学同上センターのプロジェクトによって日本に招聘され、東京大学や関西学院大学、京都大学などで講演会やセミナーを行った。本学での講演会開催はこれらに追加していただいて可能となったものである。ここに記して、感謝するしだいである。

アーミティージ氏については、すでにこれまでの邦訳書のあとがきなどで知られるところなので、経歴や業績の詳細はそれらに譲って、本講演の契機となった新たな邦訳書に関してのみ、触れることにしよう。

新邦訳書とは、二〇一九年十二月に岩波書店から発刊された『(内戦)の世界史』である。本書はこれまでの邦訳書を受け継ぎながら、独立宣言という国家形成から内戦という国家解体へ、と強調点を転換し、思想の歴史から思想における歴史へ、と方法を深めた。

世界史上にあまたある内戦は、それらをめぐる研究もあまた産みだしたが、個々の内戦に深く食い込んだ研究はあるものの、長期に、かつグローバルな視野から見ただけのものではなかった。著者が挑戦したのは、時間幅としては、ローマ期以後現代にいたる二千年にわたる「長期持続」、地理的には文字通りグローバルなパースペクティヴを持つ試みであった。本稿はこうした内容を持つ邦訳書を凝縮したものである。

(平田雅博)

一九四五年以降、ヨーロッパ、北米、それにオーストラリアや日本といった比較的豊かな国々は、「長い平和」と呼ばれる時代を経験してきました。第二次世界大戦後に訪れた、国家どうしの戦争のないこの時期は、今や近現代史の中で一番長く続いているのです。しかし、平和といっても、戦争の終結を意味しているわけではありません。現在、アフガニスタンからイエメンにいたるまで、世界ではおよそ五〇の戦争が起きています。信頼に足る最も新しいデータは二〇一八年のものですが、それによりますと、世界で起きている五二の戦争のうち、国家どうしで争われているのは、わずか二つなのです。残りの戦争はどれも、単一国家の中で始まっているのです。したがって、国家の中での戦争が、最も広範囲に及ぶ、最も破壊的で、それゆえ人類による最も組織的な暴力になっているのです。私たちは、こうした国内での戦争を「内戦」と呼んでいるのです。

一九四五年以降の内戦だけでも、戦死者の数は、世界全体で二五〇〇万を超えています。この数は、第二次世界大戦の推定戦死者数のほぼ半分です。この数字には、民間人、負傷者、難民、あるいは、病気や栄養失調のように、内戦の影響で後になって亡くなった人々は含まれていません。考えてもみて下さい——二〇一一年以降、五二万人以上のシリア人が殺され、およそ一二〇〇万人のシリア人が内戦によって居場所を失っているのです。内戦で犠牲になった人々——それだけでも圧倒されてしまいますが——以外にも、物質・経済面に目を向けてみると、そこでの影響もまた、すさまじいのです。内戦は、人々の命を——それとも

のすごい数の命をです——奪うのですが、それだけではなく、資源を無駄にし、多額のお金を、福祉ではなく戦争に費やし、経済を混乱させ、犯罪や病気を蔓延させ、生産を止めてしまうのです。戦争が終わっても、それが数十年続くのはざらなのです。

では、このような内戦を、私たちはどうしたら理解できるのでしょうか。一般的には、こうした問いに取り組むには、社会理論や政治理論に目を向けるのがよいのかもしれませんが。しかし、内戦に関しては、それは無駄になるでしょう。カール・フォン・クラウゼヴィッツ（プロイセンの軍人・軍事理論家）の『戦争論』やハンナ・アーレント（アメリカ合衆国の政治哲学者。ドイツ生まれ）の『革命について』に匹敵するような、『内戦について』というタイトルを付けた優れた研究はないのです。クラウゼヴィッツ自身、膨大な著作を残していますが、内戦についてほとんど論じてはいません。一方、アーレントは、内戦を、戦争とともに、先祖返りで、反近代的なものだと片づけてしまっているのです。現代の私たちに求められているのは、この欠陥を補うために、内戦とじっくり向きあうことなのです。哲学や理論が役に立たないのであれば、おそらく役に立ちうるのは歴史なのです。

歴史がたえず語りかけるのは、内戦の恐ろしさです。「戦争は地獄である」と、アメリカ南北戦争の將軍ウィリアム・テカムセ・シャーマン（William Tecumseh Sherman）が言ったとされています。しかし、これよりも悪いのは、ただ一つ、内戦なのです。この事実について、何世紀にもわたって広く意見が一致しています。内戦は、外部の敵に対する戦争

よりも破壊的になると考えられているのです。古代ローマの詩人ルカヌスは、内戦の後に、壊滅した街々、荒れ果てた田畑、難民たちについて嘆いていました——「これほど深く刃を突き立てることは、どんな外国人にもできなかったのだ。／深く抉られて残るその傷は、骨肉相食む内戦の手のしからしめた業」と。内戦を、さながら内部から蝕んでいく政治的身体の病のように捉えた人もいました。一六世紀後半の随筆家ミシェル・ド・モンテーニュは、フランスの宗教戦争（ユグノー戦争）の頃に、「たしかに、外国との戦争は、内戦と比較すれば、はるかにおだやかな病気だといえる」と、読者に向けて警告を發していました。内戦は、道徳的な墮落をもたらすものです。一九二二年の 아일랜드 内戦の直前に、年配のある聖職者は「外国人との戦争は、国家の最良にして最も高貴なものをことごとく表面化させる——それにひき換え、内戦は卑怯で卑劣なものをことごとくひきつける」と嘆いていました。しかも、内戦は、それが終わってから癒やしがたい傷を残すのです。T・S・エリオット（イギリスの詩人・評論家。アメリカ合衆国生まれ）は、一九四七年に、「深刻な内戦のうち、終わりを迎えられたものはあるのだろうか、疑問に思う」と述べていました。かつてのフランス大統領シャルル・ド・ゴールも、これを認めていました。一九七〇年にスペインを訪問した際、「全ての戦争は悪である……だが、どちらの塹壕にも同胞がいる内戦は、許しがたい。というのも、戦争が終わっても、平和はやってこないからだ」と述べていたのです。とはいっても、内戦は、私たちの人間社会に不可欠なものだ——私たちを人間たらしめてい

るソフトウェアの特質であって不具合（バグ）ではない——と決めてかかることには慎重でなくてはなりません。そのように仮定してしまつては、私たちは永久に内戦に苦しむ運命となつてしまふからです。

私は、近著『内戦』の世界史』で、私たちが永久に内戦に苦しめられる運命にあるといった見方を打ち破るために、歴史という道具を使つていきます。私が申し上げたいのは、内戦は恒久的なものでも不可解なものでもないということなのです。内戦には、終わりにはつきり見えるわけではありませんが、始まりを特定できる歴史があるのです。人間が發明したものは、人間の手によつて解体もできるのです。また、知的な意志によつて創りあげられてきたものも、同じような創意に富んだ意志を働かせることで、解体できるのです。

本書は、古代ローマ共和政での内戦の始まりから、今日の南アジアや中東に至るまで——言ってみれば、スツラ（古代ローマの執政官ルキウス・コルネリウス・スツラ）からシリアに至るまで——の二〇〇〇年以上の内戦の歴史を長期にわたつて扱つた初めての試みです。私のねらいは、私たちの世界観を作り上げる上で内戦が持つ意義を指摘することにあります。内戦は、破壊的な性質を持つていますが、にもかかわらず、歴史を通して、多くの概念を生み出してくれたと申し上げたいのです。政治、権威、革命、国際法、世界市民主義、人道主義、グローバリ化といった概念——これらはほんの数例でしかありませんが——は、内戦が突きつけた挑戦がなかつたならば、かなり違ったものになつていたところか、かなり貧弱なものにさえなつていたかもしれないのです。内

戦を理解し、内戦を和らげ、あるいは、内戦を阻止しようと努力を払うことで、共同体、権威、主権に対する私たちの考え方が、今日に至るまで作られているのです。

内戦は、どこにでも存在します——ニュースの見出しやその現場、胸の内や頭の中、過去の内戦の顕彰など。ヴェトナムの作家ヴィエト・タン・グウェン (Viet Thanh Nguyen) は、最近、次のように書いています。「あらゆる戦争は二度戦われる。一度目は戦場で、二度目は記憶の中で」と。これが特に当てはまるのが内戦です。内戦をいっさい免れなかったとする国もあります。その一方で、内戦の記憶なくしては自らを語れない国もあります。その一つがアメリカ合衆国です。アメリカ合衆国では、一五〇年がたつても内戦〔南北戦争〕の記憶がいまだに社会を分裂させています。他の国々——例えばイラクですが——についても、いぜんとして国際社会は、古代ローマの内戦のように、内戦が果てしなく続く永遠の戦場のようにみなしています。いずれの場合も、何が内戦で、何が内戦ではないのかについてほとんど疑いをもたれていないようなのです。誰もが、内戦を見て、それを内戦だと理解してしまうのです。しかし、内戦は、一般的に使われるほどには、きっちりとした分りやすいカテゴリーに収まるものでは決してないのです。それを気づかせてくれるのが、歴史なのです。歴史の効用とは、ことによると、歴史を忘れないようにかけられた呪いなのかもしれません。

内戦は、他の形態の紛争以上に、深くて和解の余地のない分裂から生まれるものですが、それはまた、自分たちの帰属意識や共通の属性をえ

ぐり出すものでもあります。ある戦争を「内戦」と呼ぶことは、敵を同じ共同体の構成員——つまり、外国人ではなく、同胞の市民——とみなす親近性を認めることなのです。カール・シュミット〔ドイツの法思想家〕は、次のように言っています。「内戦には独特の陰惨さがある。それは骨肉どうしの闘いである。なぜなら、敵をも包摂する共通の政治的単位の中での闘いであり、……両陣営ともに共通の統一体に対して同時に絶対的肯定と絶対的否定をもって臨むからである」と。私たちが内戦に対して恐怖を抱く原因は、ここにあるのです。内戦では、敵対しつづも同胞であることを互いに認めあっているのです。つまり、敵対する相手を映す鏡にこちら側も映し出されているのです。これらが持っている意味を、私たちは軽んじてはならないのです。

内戦の定義は、すべての人々を満足させたり、疑問や論争なしに使われたりすることは一度もありませんでした。そのため、逆説的ですが、内戦に関する豊かな研究成果がもたらされました。それはまた、内戦が、多くの異なる歴史的背景の中で議論されてきたためでもありました。とはいっても、命名すること〔ある言葉で呼ぶこと〕は、一つの枠に当てはめてしまうことになるのです。「内戦」という用語を当てはめることができるかどうかは、その対象が支配者か反逆者か、勝者か敗者か、既存の政府か第三の当事者か、で決まりうるのです。名称をめぐる争いは、紛争が終わってからも長く続くことがあります。例えば、第二次世界大戦期のイタリア・レジスタンスとファシスト政権との争いを「内戦」という言葉で表わすかどうかは、今日まで決着がついていませ

ん。というのも、「内戦」と呼べば、両陣営が同等であることを意味するとみなされるからです。しかし、一九九〇年代のリベリアやルワンダ、もつと最近ではイラク、アフガニスタン、シリアで起きているように、かくも多くの国内紛争が国境を越えて広がり、あるいは、外部から戦闘員を引き入れたりしているのに、私たちはどのようにして内戦を他の類いの戦争と区別することができるのでしょうか。要するに、内戦とは何でしょうか。

内戦のような複雑な概念にはどれも、多種多様の過去があります。歴史家は、私たちが現在の理解にたどり着くまでのいくつもの曲がりくねった道だけではなく、通らなかつた道までも示すことができるのです。私自身、これを「思想における歴史 (history in ideas)」と呼んでおきます。そして、西洋やグローバルな議論において鍵となる思想を、古代ローマから現代の中東・南アジアまでの様々な歴史的背景の中で考察したのである。内戦の意味をめぐる数世紀にわたる議論の中に、私は、三つの主要な転換期があることを突きとめました。一つ目の転換期は、一八世紀末です。これは、当時の人々が、暴力的で体制転換を促す大変動のもう一つのカテゴリー——つまり、革命です——から、内戦を区別する必要があつた時期です。二つ目の転換期は、一九世紀半ばです。この時には、内戦の意味を法律用語に取り込もうとする初めての試みが行なわれました。こうした試みがなされたのが、一八六一年から六五年にかけてのアメリカ南北戦争として知られる紛争の時期だったことは偶然ではありませんでした。そして三つ目の転換期は、冷戦の最終局面の時期

です。この時には、社会科学者たちが、代理戦争や脱植民地化の時代に世界各地で起きていた紛争を分析する手がかりとして、内戦を定義しようとしてきました。私たちが内戦の意味をめぐつて混乱したり、内戦を当時の紛争に当てはめようとして混乱したりするのは、内戦の概念をめぐつて長い間続いた論争の歴史の結果なのです。ですから、なぜ今日でも内戦の意味をめぐつてこれほど論争が起きるのかを理解するには、歴史の助けを借りるしかない、申し上げたいのです。

この物語を語るにあたり、私は本書を三部構成にしました。各部は二つの章からなっています。第一部「ローマからの道」では、紀元前一世紀から紀元五世紀にかけての内戦の概念の変化を追っています。この時代には、ローマ的概念が、内戦についての様々な議論——基準となる法的な定義、対外的に示される様々なるしの見分け方、内戦の起源、再発の可能性——をはつきりと形作つたと考えています。ローマ人が、最初に大規模な内紛に苦しんだというわけではありませんが、彼らはそれを初めて内戦として経験したのです。内戦の概念の歴史からみれば、すべての道はローマから始まるのであって、アテナイやトウキュイデスの世界にまでは遡れないと言えます。というのは、そこでは共同体内部での紛争は、ローマで発明された内戦の概念とはかなり違って理解されていたからなのです。古代ローマの遺産自体は、内戦に関する様々な解釈を取りこみ、ローマの歴史における内戦の位置づけについての様々な対立する物語を伝えていったのです。

内戦は、発見されるのを待っている自然の中にある事実ではありません

んでした。それは発明されなければならないものであり、人間の文化が創りだしたもののなのです。内戦が発明されたのは、二〇〇〇年より少し前で、紀元前一世紀に遡ります。「シヴィル（市民の）」であり、かつ、「ウォー（戦争）」でもある集団的な暴力行為を最初に理解したのが、ローマ人だったのです。ローマ人たちは、自分たちの紛争に、戦っている相手の名前——この場合は、同胞市民、つまり、ラテン語では「キウエス（cives）」<sup>(1)</sup>から、「civil（市民の）」<sup>(2)</sup>「civility（礼儀正しめ）」<sup>(3)</sup>「civilization（文明）」<sup>(4)</sup>「civilian（民間人）」という語が生まれました——を付けたのです。そして彼らは、ちゃんとした形の戦争であることを対外的に示す様々なしるし——太鼓やラッパ、旗や指揮官——がそろると、市民による闘いを戦争と呼んだのです。これが「ウォー（戦争…ベッラムbellum）」かつ「シヴィル（市民の…キウイレcivile）」<sup>(5)</sup>、つまり、ラテン語では「ベッラム・キウイレ（bellum civile）」だったのです。しかも、ローマ人は、戦争とは、外部の敵と戦う場合にのみ正当となりうると考えていたために、こうした内部の敵は、きわめて不穏な存在だったのです。その結果、内戦という考え方は、意図的に逆説的であり、矛盾していたのです——つまり、内戦とは、厳密には敵ではない相手と戦う、戦争としてはありえない戦争だったのです。

当初、ローマ人は、内戦という考え方を受け入れるのをためらっていませんでした。長い間、彼らは、この言葉を恐る恐る使っていたのです。しかし、そのような争いが、共和政期と帝政初期の時代を通して頻繁に繰り返されたために、ローマ人の公生活の中に埋め込まれたように見えてし

まったのです。古代ローマの歴史家たちは、内戦に陥りやすい——あるいは、内戦に呪われているとさえ言えるような——文明の物語——実際には、一連の物語ですが——を創りだしたのです。そしてそれは、何世紀にもわたって続き、初期近代や近代ヨーロッパ、あるいはそれを越えて、後世の内戦理解に影響を与えたのです。実際、一五〇〇年以上にわたって、内戦は、ローマ的な見方で捉えられてきたのです。

第二部「初期近代の岐路」で論じていますが、一六世紀から一八世紀にかけてのヨーロッパでは、これら「古代ローマ」の解釈やその後の物語から様々なレパートリーが提供されており、ヨーロッパの思想家たちは、それを使って自分たちの内戦の概念を考え出しました。啓蒙時代になって、彼らが内戦と革命という二つの概念を区別するようになって初めて、ローマの遺産から解放されるようになります。「内戦と革命」とともに暴力的な政治的大変動が、道德的にも、政治的にも、それぞれまったく異なる意味合いを持つようになったのです。内戦は、後ろ向きで、破壊的、抑圧的とみなされる一方、革命は、未来志向で、創造的、進歩的だとされました。アメリカ独立戦争のような成功した内戦は、しばしば革命として、イメージチェンジされたのです。革命家たちは、後になって、自分たちが内戦を戦っていたことを否定するようになりま

す。私たちは政治的な立ち位置をいとも簡単に変えられるのです——私は革命家である。あなたは反乱者である。彼らは内戦を戦っている、と

いったように。

本書の第三部「今日への道」は、アメリカ南北戦争の時代から今日ま

での内戦の概念の遺産をたどっています。内戦の思想の歴史に対して一九世紀がもたらした大きな貢献とは、内戦を法律の領域に持ち込むことで、内戦を「文明化」しようとしたことです。この試みは、プロイセン生まれでアメリカ合衆国に移民した法学者であるフランシス・リーバー (Francis Lieber) が、戦争法の近代的な体系化を初めて行なった一八六〇年代に始まり、第二次世界大戦後のジュネーブ諸条約の改定で終わりました。内戦を文明化することは、今日まで、国際法学者たちの課題であり続けています。この第三部の後半では、彼らが内戦の文明化に関心を持った原因や、私たちが国際人道法と呼んでいるものの中で内戦が引き起こしている緊張をテーマとして扱っています。

一九六〇年代は、もう一つの重要な画期となりました。戦後の社会科学者たちが、大規模紛争に関するビッグ・データに関心を持ち始めたのです。この時期に出てきたのが、内戦を定義する初めての試みでした——内戦を取り締まったり、無くしたりするのではなく、他の形態の戦争やその他の暴力の類い——たとえば、暴動 (Riots)、クーデター (coups d'état)、植民地解放運動——から内戦を区別するという試みです。一八一六年以降に起きた戦争に関するデータを収集・分析することで、地球上で起きた紛争事例の評価をめざす、経験主義的な社会科学による最も体系的な試みとして始まったのが、ミシガン大学の「戦争相関プロジェクト (Correlates of War Project)」でした。当初、このプロジェクトは、国家間の紛争に焦点を当てていたのですが、すぐにカバーする範囲を広げ、内戦、騒擾 (insurgencies)、外国の介入を含めなくてはな

らなくなりました。しかし、これらを互いに見分けるにはどうすればよいのでしょうか。区別が必要になったのです。このプロジェクトによる内戦の定義には、数値的な区別、境界となる条件、経験的ないくつかの判断基準が入っていましたが、多くの問題も抱えていました。

持続する軍事的戦闘で、主として国内で戦われ、年間少なくとも一〇〇〇人が戦闘で死亡するもの。中央の政府軍が反乱軍に対抗し、反乱軍には、自軍の犠牲者の少なくとも5%に当たる犠牲者を政府軍にも出させる……能力があるもの。

これは、一見すると、厳密な定義のようですが、この定義では、同時代人々が内戦だと捉えていた多くの紛争が内戦とはみなされなくなりました——たとえば、アメリカ革命、一八四七年のスイス分派同盟戦争、アイルランド内戦、アルジェリア独立戦争、それに北アイルランド「紛争」など。しかし、こうした欠点があるにもかかわらず、この内戦の定義は、データ群を作成したり、アメリカ合衆国議会会で証言したりと、今日まで政治学者たちによって使われています。

問題のあるこの定義は、グローバルな現象としての内戦を明らかにするのに使われています。しかし、それは、グローバルな内戦——これが本書の最終章のテーマです——の説明にはなりません。二〇世紀を通して、内戦が起きる境界の範囲が広がり、「グローバルな内戦」という概念が国家や帝国を越え、全世界を包み込むようになりました。「グ

ローバルな内戦」という状況は、特に一九六〇年代初頭に、たとえば、カール・シュミット、ジョン・F・ケネディ、ハンナ・アーレントの三人——トリオ（三人組）というには不釣り合いですが——が言及していました。内戦の拡大は、人間どうしの戦争はすべて内戦であると長い間示唆していた世界市民主義的な思想の様々な潮流に深いルーツを持っていました。相互に結ばれた私たちの世界では、人類の戦争で、もはや「シヴィル」「内戦」ではないものはありません。というのも、シリアの優れた政治分析家ヤシン・アル・ハジ・サレー (Yassin Al-Haj Saleh) がシリアについて説得力をもって論じているように、ここは「世界の危機である。……誰であれ、遠くにいるからといって隣人にならないわけではない。誰であれ、異質すぎるからといって「我ら」の側に属せないわけではない。誰であれ、異常すぎるからといって政治に関われないわけではない」からなのです。ヤシンは、この共犯性 (complexity) があるからこそ、「世界に対する私たち自身の責任を、そして、私たちに対する世界の責任を」、私たちが考え直すことが間違いないと必要だと言っています。

本書の結論では、過去に出された内戦に関するすべての概念が、赤字のような国際機関、報道機関、研究者の議論の知的なDNAの中に現在も残っていることを論じています。何が内戦なのか、何が内戦ではないのかについて、私たちが混乱するのは、これらの概念によるところが大きいのです。古代ローマ共和政に起源を持ち、それ以降、法律や社会科学で論じられてきた内戦に関する概念の歴史の蓄積が残っているため

に、今日の私たちが内戦を理解するのが難しくなっているのです。この難しさについて、近年のイラクとシリアの歴史から三つの例を使って説明することができます。

まず、イラクです。二〇〇三年にアメリカ主導の侵攻が行なわれて以降〔第二次湾岸戦争（イラク戦争）〕、二〇〇六年末から二〇〇七年初めにかけて、ひと月に三〇〇〇人以上の人々がイラクで亡くなっていました。（この出来事は、私自身が政治的言語としての内戦に興味を抱き、この本を着想する直接のきっかけになりました。）この流血の暴力をどう呼ぶのかについて、激しい対立が起きました。ブッシュ政権の代表やその他の者——そのほとんどが、右寄りの軍事戦略家や政治専門家でした——が、これをテロリズムあるいは騒擾 (insurgency) と呼びましたが、内戦であることは否定したのです。しかし、イラク内外の多くの人々には、イラクで何が起きているのかについて疑う余地はありませんでした。その一人、当時の国連事務総長コフィー・アナンは、BBCで次のように話していました。「レバノンやその他の地域で紛争が起きたとき、我々はそれを内戦と呼んだが、こっちの方がもっと激しい」と。同じ頃、アメリカ合衆国の各種メディアが、イラクでのこの紛争を内戦と呼んでいました。若いシリア派の首長アデル・イブラヒム (Adel Ibrahim) は、『ニューヨーク・タイムズ』に対して、「ここイラクでは内戦が行なわれていることを世界に知らしめてやっても構わない。これは壊滅的な内戦だ。……誰が我々の敵で、誰が我々の友なのか、我々には分からない」と、激しい口調で語っていました。こうした見方に対し



ては、まったく予想通りですが、強い反発がありました。たとえば、二〇〇六年二月、イラク首相ヌーリー・マリーキー (Nouri al-Maliki) は、この紛争を内戦と見なすことを断固拒否し、まともな交戦者としてのサダム・フセインの「イメージを高めた」としてコフィー・アナンを非難したのです。

では、この論争は、なぜ重要なのでしょう。実は、この時点で、イラクが内戦状態にあると認めることは、イラク政府が権威を失ったことを意味していたのです。さらに、アメリカ合衆国が率いる多国籍軍にしてみれば、紛争をどう捉えるかで、様々な戦略的關係が変わる可能性があったのです。スンナ派かシーア派か、どちらを多国籍軍が支持すべきかを決めるなど、支配をめぐる国内の紛争に対して、多国籍軍が賭けをする事になりえたのです。また、侵略者がそれまではけ口のなかった宗派対立を爆発させ、多国籍軍の手に負えないような事態に陥ることもありえたのです。こうした不安定な状況が続けば、それがイラクの境界を越えて広がらないようにするために、もつと高度な軍隊の投入が必要になるかもしれないのです。あるいは逆に、外国勢力がいることで現地のジレンマ的な状況が悪化し、解決できないほどさらに深みに引き込まれるのを避けるためには、早期の、不名誉な撤退が必要になるかもしれないのです。

今度は、二〇一一年から翌年のシリアの例を取り上げましょう。一般のシリア人は、二〇一一年から二〇一二年前半にかけてのバツシャー・アル・アサド政権に対する闘いを内戦だと理解していました。これ

に対し、シリア以外の世界各地にいる利害関係者たちは、シリアが内戦状態に陥ったのかどうかをめぐって議論していたのです。二〇一一年二月、ホワイトハウスの報道官は、シリアは内戦状態にあるとした国連職員の意見に賛成かどうかと尋ねられ、異議を唱えました。「シリアでは暴力が停止する必要があると、我々は考えている。しかも、その対象には反対分子も含まれる」と。さらに彼は、「だが、『内戦』という言葉を使ったときに連想するような方法で、両者を同等に扱うのは無理であると私には思われる」と言ったのです。シリア政府（アサド政権）から見れば、それは反乱 (rebellion) にすぎませんでした。これに対し、反対勢力側は、抵抗運動 (resistance) を行なっていると言っていたのです。また、ロシアやアメリカのような大国は、内戦だと表明することでそれぞれの首脳に降りかかる危険性を認識しつつ、介入か非介入かをめぐって論争していたのです。

国際赤十字委員会は、二〇一二年七月になって、シリアで起きている事態を「国際的性質を有しない武力紛争」（つまり、内戦）として認めたのですが、それは、紛争が勃発してから一年以上が経過し、推定で一七七〇〇人も死者が出た後のことだったのです。国際赤十字委員会がこの決定を下したことでようやく、ジュネーヴ諸条約の関連規定を当事者に適用できるようになったのです。この紛争を内戦と呼ぶことを躊躇するのが、二一世紀の国際的諸機関では当たり前になっています。というのも、内戦という言葉を使うか、使わないかが、政治的にも、軍事的にも、法律的にも、倫理的にも、非常に多くのことに影響を与えるか

らなのです。内戦という行為を人道的にする——これは、つまり、内戦という行為に対して人道的な制約をかけ、内戦による悲惨な犠牲者を出すことを最小限に抑えることです——ために作られた一連の法的議定書は、シリアに対する国際的な〔国内問題とは見なされない〕当事者の活動を抑えることにしか役立つていないのです。

イラクとシリアに関するこうした例が示しているように、内戦がどういった特徴を持っているのか、はつきり定義しようとしても、それはとても難しいことなのです。あるいは、その特徴を個々の紛争に当てはめることも、同じくらい難しいのです。はつきりした定義を用い、厳密にすることが、政治的で、イデオロギー的になるのは避けられないのです。こうした定義を当てはめることも、定義の個々の内容も、常に主義主張をめぐる論争的になってしまふのです。これは、内戦には特に当てはまると言えます。——内戦は、論争の本質的な要素をめぐって本質的な議論となる概念なのです。

哲学者、法学者、あるいは政治学者でさえも「内戦」という用語をめぐる論争で結局は混乱しただけだったかもしれないのですが、そこで状況を嗅ぎ分けるのが歴史家——少なくとも、こゝいる歴史家！——なのです。歴史家の役目とは、双方が同意できるようなより良い定義を見つけ出すことではないのです。それよりも、そうした対抗する様々な概念がどこから出てきたのか、それらが何を意味したのか、内戦を生きた人々の経験、あるいは、過去においてそれを理解しようとしてきた人々の努力から、これらの概念がどのようにして出てきたのかを問うことに

あるのです。「内戦」というレッテルを貼るか、貼らないか——今日、これはきわめて高額の賭けになっていて、政治がそれを考慮しないで行うことはできそうもないのです。どのカテゴリーを当てはめるかは、何万人もの人々——たいていは、自分たちの運命を決めることなど、少しもできない人々です——の生死にかかわる問題になります。私たちが見ているものが本当に内戦（あるいは、「非国際的武力紛争 (non-international armed conflict) (NIAC)」)なのかどうかを決めることは、戦争で分裂した国内外の人々に対して政治・軍事・法律・経済的な影響を及ぼしうるのです。内戦を一つの定義に限定しようとする試みは、複雑さや論争を増すだけだったのです。そこで、もう一つの方向で進める、つまり、何世紀にもわたって示されてきた内戦の多様な意味を掘り起こす方が良いと思われるのです。

\* \* \* \* \*

私が描いた、内戦の思想における二〇〇〇年の歴史の目的をごく簡単に振り返ることで、話を結ばせてください。内戦を長期的に見ることは、次の三つの点に導いてくれると私は確信しています。——謙虚 (humility)、複雑性 (complexity)、希望 (hope) の三つです。まずは、謙虚です。というのは、今日の私たちが内戦について知っていると知っていることのほとんどが、数世紀前、あるいは数千年前に見出されていたことが分かったからです。内戦は長く続くものだ、再発することが非常に多い、他の紛争よりも深い傷跡を残す——と、今日の社会学者た

ちは、私たちに教えてくれています。しかし、このどれも、ローマ人たちは、紀元前一世紀に、彼ら自身の内戦の最中に気づいていたのです。キケロからアウグステイヌスまでの五〇〇年間にわたって、内戦に對して思索が続けられていたのです。次に、複雑性です。というのは、内戦の意味や意義をめぐる論争は、今日、激しくせめぎ合う多様な歴史の結果なのです。内戦の意味をめぐる論争は、内戦の多様な歴史から起こったものなのです。その歴史は、適切に理解されるよう、慎重に掘り起こす必要があります。

最後に、希望です——たとえ、控えめの希望であってもです。内戦を長期的に見ることで、内戦は、人間がどうすることもできない災いではなく、徐々に癒やすことができる苦しみであることが示されたのです。実際、内戦の発生は減っているように思われます。大規模な内戦が、数十年に及ぶ殺戮と破壊ののちに終結しました——スリランカ内戦（一九八三—二〇〇九年）、もつと最近ではコロンビア内戦（一九六四—二〇一六年）がそうでした。もちろん、その後遺症が無くなったわけではありません。西半球の南北アメリカ全体で内戦がないのは、この二〇〇年でほとんど初めてのことです。おそらく人類は、二〇〇〇年以上も前にローマ人が初めて発明したものを、ついに消し去ろうとしているのかもしれません。しかし、そのような時が訪れるまでは、私たちには歴史——それも、非常に長期にわたる歴史——が必要なのです。最も破壊的で不快なもの〔内戦〕から、今後の私たちが逃れることができるかを考えるために。